

豊高での40年

元豊浦高校監督
渡辺 一平

【第1回】

平成2年度の理事総会が、平成3年2月23日（土）に徳山で開催された。その際に、山口県バスケットボール協会機関誌に関することについて話が出た。20年も昔のことであるが、昭和41年・42年・43年と、当時私が県協会の技術担当理事を引き受けていた折、当時豊浦高校バスケット部の副顧問でもあった片山隆剛氏（現下関商業高校定時制教頭）と二人して、県バスケットボール協会の機関誌を第12号まで発刊した。その後、これを県協会広報担当に譲ったが、途切れてしまった。機関誌代は集めているものの、肝心の機関誌は発行されず、年一回の県協会理事総会の際、各担当常任理事から報告がなされ、それで満足するしかない状況が長く続いてきた。

しかし、3年前より、広報委員会から、県協会に係わる全ての大会の上位の試合結果をまとめた、大会結果報告（今年度は第三号が配布された）が出されるようになった。これは、素晴らしい試みであり、担当の方のご骨折りは大変なものだと察している。ただ、協会の末端まで現況を知ってもらうものとしては、正直なところ不十分だと感じてきた。

しかもこの度、高体連バスケットボール部が、昨年に続き機関誌代を4000円から6000円に大幅に値上げすると聞き、一抹の危惧を抱いていた。そういう時に、高体連の執行部のほうで西村修氏（高体連・山防地区理事）と大木至氏（高体連・徳山地区理事）が中心になり、山口県高校体育連盟バスケットボール機関紙発行に踏み切るといふ計画を聞き、胸のつかえを下ろしたという次第である。そして、こう言った活動が、最近低迷し続けている山口県バスケットボール協会活動の起爆剤ともなり、さらに、高体連バスケットボール部全体の結集力を高め、他県に負けることのない強豪山口県を作り上げてくれる一助ともならんことを期待している。

発刊にあたり、是非弘に豊浦高校での40年間のバスケットボールの歩みを書いてくれるようにとの依頼があり、昔を振り返り思い出すままに記述することにした。できるかぎり事実に基づいて述べることにするが、記憶に間違いのあることもあろう。お許し願いたい。

私は、旧制中学校5年間は、父母の勧めもあって、部活動は剣道部に入っていた。しかし、各種スポーツが好きで陸上競技もしたし球技等もした。冬場は寒稽古が早朝実施される。それが終わって授業が始まるまでの待ち時間が寒く、よく上級生や友達に誘われて戸外でバスケットボールをして遊んだものだ。それがバスケットボールと係わった始まりであったろうか。また、中学三年の時のことだと思う。中学校の大会が防府であり、剣道の選手として出場した。その帰りにバスケットボール会場（現防府商業高校）の屋外コートでのゲームをみた。防府高校が強かった。

太平洋戦争が始まり、球技はほとんど行われなくなった。昭和19年4月剣道の道を目指して、東京体育専門学校（現在の筑波大学・体育学群）に入学した。一般体育授業前の、朝の剣道型に始まり、放課後は剣道の稽古に励んだ。何があろうと一日一度は竹刀を持つことが、剣道科学生の使命であった。これ

が、私の教師生活40年の基本姿勢を作ったものであろうと思う。

昭和20年4月招集を受け、山口部隊に入隊。北九州で訓練と陣地構築。8月に終戦。10月30日復員となった。

休校中であった学校は、11月から開校された。しかし、占領軍の指示で、学校体育において、柔道・剣道が禁止されるに及び、当然の如く、課外活動でのその両者の活動は厳しく禁止された。さらに、柔道・剣道科の学生の体操科への転科措置が取られた。時の経過とともに、次第に各運動部活動も活発に行われるようになってきた。

剣道というかけがえのない場を失った私は、入学以来寮生活を共にした親友の手嶋昇氏（日本女子体育大学教授）の勧めと、素晴らしいバスケットボール技術を私に見せてくれた、先輩の石田啓氏（国士舘大学教授）にひかれバスケットボールに入部した。校内で寮生活をしていた私は、夕食後も体育館の薄暗い電灯の下で、ネットをボールが通過する音を頼りに、ロングシュートの練習に励んだ。当時ルールブックも手に入らず、先生に借りて、二日徹夜で全部写したことを懐かしく思い出す。

三年生の夏休みは学校で、四年生の夏休みは長野県の松本で、合宿練習をした。9月の全国高専大会は準決勝で敗れて三位（優勝は、東京高等師範。二位は、横浜高等工業専門学校）に続いて、東京都の高専リーグ戦一部では優勝することができた。これが私の学生時代の最後を飾るものであった。

物不足、食糧不足、人不足の世の中で、教員採用試験もなく、わが家から通勤に便利な豊浦高校に、昭和23年4月から勤務することになった。教育実習でお世話になり、その時に話が決まったようなものである。4年間の学生生活も、2年のときにはほとんど勉強もせず、3年で卒業したようなもので、教師生活は暗中模索から始まった。

（注）

高等専門学校というのは、学制改革によって新制大学に吸収、または、名称変更され、我々の世代には馴染みのないものである。簡単に言えば、現在の大学の教養課程の相当すると考えていいだろう。例えば、第一高校・東京高校は、東京大学へ、都立高校は、都立大学へと吸収、または、発展的に解消した。

東京都の高等専門学校リーグは、一部から三部までに分かれていた。代表的なチームには、東京高等師範学校・東京高等商業専門学校・早稲田大学専門部・第一高等学校・東京高校・成城高校・成蹊高校・日本体育専門学校などがあったそうだ。

○筆者略歴紹介

大正14年5月	誕生
昭和19年3月	旧制小野田中学卒業
昭和19年4月	東京体育専門学校 入学
昭和23年3月	同校 卒業
昭和23年4月	山口県立豊浦高校に赴任
昭和63年3月	同校 退職
昭和63年4月	山口大学、福岡教育大学の非常勤講師となり現在に至る。

【第2回】

就職した昭和23年4月は、50年の歴史を持つ山口県立豊浦中学校が、山口県立豊浦高等学校として新発足した年で、3年生2学級、2年生4学級、1年生6学級、併設中学校3年生5学級の学級編成で、併中3年の体育の授業を受け持つことになった。

当時は、物資不足で食糧事情は悪く、米も配給で一日2合7勺（約3カップ）であった。当時の運動部は、野球、軟式庭球、排球、籠球、送球、卓球、陸上競技、体操、相撲、水泳の10部で、生徒の部活動参加者も少なく、顧問教師を希望する職員はほとんど無く、籠球（バスケットボール）と送球（ハンドボール）の掛け持ち顧問を引き受けることとなった。ハンドボール部顧問とは名ばかりで、生徒の管理と試合引率のみで、技術指導はほとんどしなかった。

バスケットボール部は、部員3年2名、2年2名、1年5名、併中10名余りで、練習場は旧剣道場。梁にバックボードを打ち付けて、広さは縦11メートル横22メートル、窓ガラスもなく吹きさらし、雨漏れはし、床の雪は掃き捨てた。床板を度々踏み破り、その都度自分で修理した。ボールは皮を縫い合わせ、チューブを入れて、綴ひもでとじたものを1、2個準備できる程度、シューズも不良で、1ヶ月もたたずに裏が擦り切れ、自動車の修理工場に行きゴムを焼きつけてもらった。コートには電灯がなく、夏の練習は一時間余り、冬は4時半になるとボールが見えず、短時間の練習で終わった。しかし、23才の私にとっては弟のような生徒とともに練習ができるのが何よりの楽しみであった。

学校での授業、そしてバスケットの練習、家に帰っての食事、学生時代と変わったところは、母の心のこもった食事であった。毎日学生時代と同じような生活の中で、一回目の俸給を戴いたときには涙が出た。母に全部さしだした。これがきっかけで、退職するまで給料袋をそのまま妻に手渡す習慣になってしまった。母が残してくれた昭和23年4月の俸給支給明細を見ると、二度に分けて貰い、支給総額は1878円92銭、税金等控除が324円92銭で、手取り1554円であった。

昭和23年4月に文部省は、戦後スポーツ界の混乱している状況を整備すべく、学徒の対外試合に関する通牒を出した。これによると小学校は校内、中学校は宿泊を要しない範囲、高校は地方大会（全国大会は年一回程度）にそれぞれとどめること、しかもそれらは教育関係団体が主催するものに限るとした。これにより、高等学校ではスポーツの主体性の確立と教育的運営を目指して、6月に全国高等学校体育連盟が発足した。各県とも、これにならって組織作りを急いだ。

山口県のバスケットは、協会主導型で、山口大学内に事務所を置き、理事長に福井氏（山口大）が就任されていた。しかし、藤田氏（山口高校）、野上氏（山口女子大）、徳田氏（県庁）と次々に代わり、昭和26年か27年頃と思うが、三戸氏（防府）に移ることになり安定した運営がなされるようになった。県高校体育連盟バスケットボール部は、水嶋氏（大津高校）が、県協会審判部長を兼任されながら2、3年お世話されたが、布施氏（下松工業）に専門部長を譲られた。この間、武田薬品から宇部医大に勤務された、斎藤太郎氏、宇部工高に勤務されていた伊藤菊一先生のご尽力を忘れることはできない。

高校のチームは男子がやや女子を上回っていたようだが、併せて30チーム程度であったろう。下関地区だけについてみると、男子は下関西・下関商業・下関工業・豊浦で、女子は下関南・長府・早鞆、合計7チームであったが、数年後には男子の下関中央工業・田部・早鞆、女子の田部・下関商業と、急速に増加していった。

しかし、設備は正規のコートを持つ学校はなく、下関西・下関南・田部に約12×22メートルのWコ

ートと、下関商業・下関工業に細長い11×25メートルのコートがあり、それを利用して、地区大会などが開催された。全県下でも山口高校に、15×25メートルの正規のコートの取れる体育館があるだけで、ほとんどの大会は山口で開催され、アウトコートを試合に使用することもしばしば。昭和30年にやっと大嶺高校に一面ではあるが、木造の正規のコートの体育館ができた。(昭和31年6月には、インターハイ予選を大嶺高校で開催した。)

昭和23年4月からの学校での練習は、満足にできるような状態ではなかったが、試験中でも毎日コートに出た。うれしそうに練習に出てきてくれる生徒の顔を今でも忘れられない。この光景を異様な顔をしてみる先生もおられた。

練習場の天井の梁は下から4メートル、打ち付けられたバックボールドのリングは、梁下約60センチ。梁と梁の間には約2.5メートルの隙間がある。フリースローは梁に当てずに投げれたが、ループのあるものは、梁が邪魔になりできず、梁1本越しのミドルシュート、梁2本越しのロングシュートの練習は、どこのチームも真似のできない絶好のループシュートであった。梁に当たらねば、大体ゴールインする。但し真正面のみで、45度、あるいは零度のシュートは4メートル以上離れてはできない。日常の練習は、ランニングシュート、ドリブルインシュート、ゴール下のピボット・シュートとパスで、ドリブルは、ボールが悪くほとんどしない。好んでしたのは、1対1と、パスゲーム。1対1は全員を相手に稽古台になった。練習試合は下関西に出かけたが、一度も勝てなかった。県秋季大会には、宿泊費が出ず、山口の学生下宿屋に、米持参で泊めてもらい出場した。一番成績のよかったものは、中学校の大会で、併設中3年生を引率して、防府で準決勝まで進出し、大津高校の併設中に敗れた試合であった。当時県下では、下関西、山口、防府の男子、女子では、下関南と山口女子が強かった。

第一回全国高等学校選手権大会は、国民体育大会と同時に福岡県で開催され、男子は防府が二回戦で、女子は山口女子が一回戦で敗れた。私は、藤田氏(山口高校)がハンドボールの山口クラブを結成するから、是非協力して欲しいとの要請で、旧県営グラウンドで度々合宿練習し、久留米の国体(フィールド・ハンドボール)に出場した。私がハンドボール出身であるように言われるのは、続いて、東京・名古屋・広島・福岡国体に選手で出場したからであろう。久留米でのハンドボール終了後、福岡市内でバスケットボール高校男子決勝と、一般男子決勝を見学した。高校は山城高校が佐賀一高校に勝ち、一般は交通事情が悪く遅れてきた関学クラブが、テクニカル・ファールを取られ、全東京が優勝した。

昭和24年は、高等学校の統合が行われ、豊浦高校は長府女子高校と合併し、下関東高等学校と名称を改め、男女共学が始まった。その上、通学に便利な学校へと通学区も設定され、生徒の二割程度が転校を余儀なくされた。しかし、共学とは名ばかりで、豊浦学舎(豊浦高校校舎)には男子、長府学舎(長府高校校舎)には女子と、統合前と何ら変わることはなかった。

部活動は時々交流し、女子も豊浦学舎に、男子も長府学舎に来て合同練習した。その時は、男女とも練習を指導したが、女子の指導は形式的で、常に生徒から不足が出たが、適当に過ごした。夏期休業中に、初めて豊浦学舎で、男子の合同練習を5日間寄宿舎を利用して実施した。主として2ガードの8の字戦法(エイト・オフェンス)の練習が中心であったように思う。秋の市民体育大会で、初めてやっと下関西高校を破ることができた。

東京の国民体育大会には、男子代表山口東高校が一回戦で敗れた。女子は、下関南が、大活躍し、三回

戦で敗れた。男子には、防府高校の木村、山口東高校の大島と優秀選手がおり、後日早稲田大学の中心選手として活躍した。

昭和25年春休みには、九州全域、山口県のチームを集めた、西日本新聞社主催の、西日本大会に出場、福岡中央高校、伝習館高校、島原高校と破りベスト8まで進出し、八女高校に破れたが、かなり自信をつけることができた。

学校は4月から男女共学の完全実施を始め、1年生は長府学舎に、2、3年生は、豊浦学舎で授業が開始され、1年の授業を受け持つことになり、長府学舎に勤務することとなった。しかし、バスケットボールの部活動は、男女とも、豊浦学舎で実施される。やむなく授業終了後は徒歩で、長府学舎から豊浦学舎へ、毎日1年生部員と一緒に移動した。長府学舎勤務の諸先生には、私の行動を影で非難する人もいたが、意に介さなく過ごした。今までのように全生徒に接することも出来ない毎日であり、顔触れが変わる日も多く、退部者も増え、男子3年5名、2年3名、1年5名となり、女子は併せて10名程度となった。練習もままならぬ状態で、県内大会ではベスト4それ以上にはなれなかった。

名古屋国体に出場した大津高校は、新人で、大型チームを作り、1-2-2のゾーンディフェンスをひいて臨んだが、一回戦で敗退。女子代表の熊毛南高校も、静岡に敗れた。冬休みの、西日本新聞社主催の西日本大会には、県代表として推薦を受け、鳥取にいったが、三回戦（ベスト16）どまり、昭和25年度の最終戦となった。

昭和26年度は、2、3年生のいる豊浦学舎勤務となり、併設中3年が高校3年生となる年、就職して4年目、密かに上位を狙ったものの、学校の統併合と退部者を出し、中学校大会ベスト4のメンバー4人を失い、戦力低下、練習は欠かさなかったものの、上位進出はならなかった。

この年から全国高校選手権と国民体育大会が別個に開催されるようになり、インターハイは名古屋で実施され、大津高校が、山本高校（大阪）、長崎東高校を破り、準々決勝に進出したが、武蔵高校（東京）に破れ、女子は熊毛南が二回戦で栃木女子高校に破れた。しかし、国体（福山）では大津高校が下館一高校、海南高校、佐倉一高校に勝ち、準決勝で北越商業高校（新潟）に57対55で破れ、熊毛南が津高校、お茶の水付属高校に勝ち、木更津二高校に44対43で破れた。山口県勢が、全国ベスト4（男子）、ベスト8（女子）に進出した快挙は称賛に値するもので、それ以後40年になるが、この記録に匹敵するものがない。当時の男子監督水嶋哲夫先生に、女子監督谷馨先生に話して戴くと良い勉強になるだろう。私は、広島でのハンドボールの試合に三位となり、すぐに福山の試合会場に駆けつけたが、決勝しか見れず残念なことをした。

昭和27年度は再度長府学舎勤務となり、昭和25年度と同じ生活を続けた。諸先生方の理解も出来、応援してくれる人も増えたが、3年生が途中で退部する等苦難の道を通った。2年に桑原道親（帝人勤務。東京在住）、1年に佐藤武（自営。東京在住）と、優秀な選手がいたので、次年度に賭けたが、不幸にして、28年2月肺結核で入院。二年間休職の身となった。

【第3回】

昭和28年2月末に高熱で、長府四王司山の中腹にある光風園（結核療養所）に担架で運ばれた。肋膜

から水を2度抜き、やっと熱も下がり、徐々に回復に向かい、1ヶ月余りで絶対安静も解かれた。結核菌の3ヶ月培養でも検出されず、6ヶ月の肺断層撮影の結果もよく、10月には退院療養の身となった。その間学校のバスケットボール部は、白松寿人氏（元保健体育課長）が顧問を引き継ぎ、部員の生徒も試合の度に状況を報告に来てくれた。主治医から「学校復帰もよかろう」とのことで県教委区委員会に申し出たが、「体育教員は身体が強健でなければ」と出校を許してもらえなかった。

学校は昭和24年4月豊浦高校と長府女子高校が統合され下関東高校になっていたが、昭和29年4月に統合を解消し、男女別学の豊浦高校と長府高校に分離独立となった。私は休職の身であったが、時々バスケットの練習も見に行ったり、秋季県体では山口まで足を運んだ。

昭和30年4月に復職が許され、再出発することになったものの、ほとんどが新しい部員で、私の練習や気持ちを受け継いでくれた生徒は皆無に等しかった。3年生の中に長府中学校出身の中川勲君がいた。彼はこの難しい時期にキャプテンを引き受け、私の片腕となり、ゲーム作りに貢献した。彼は中学校でバスケットを経験し、技術が優れていた。中川君の活躍もあって中国大会予選で勝ったものの、中国大会では、彼が盲腸炎手術直後で、体力の回復もままならず敗れた。インターハイ予選は、決勝で、防府商業高校の思いがけないハーフコートの大きいゾーンを攻め切れずに涙を飲んだ。

中川君は卒業後、広島大学に進み、哲学を学ぶ傍らバスケット部で活躍を続け、大学卒業後直ちに早鞆高校女子部に就職し、バスケット部の顧問となった。研究心が旺盛で、技術講習会には常に足を運び、日本女子体育大学の夏期合宿にも、萩、松山と2度にわたり私と一緒に1泊2日の見学を行った。春には京都大会に出場を重ね、また関門大会の女子部の開催に尽力し、その基礎を築いた。

昭和40年頃からチーム力も向上し、宇部女子、長府、早鞆の3強の時代を作り、昭和48年、49年と連続してインターハイ出場。さらに中国制覇も果たし、国体チームの監督も務め、長い間山口県の第一線で活躍した。

昭和56年8月、部の合宿練習中、食道静脈瘤破裂で一命を失うかと思われたが、1年後に復帰し、早鞆高校の復活をかけて意欲を燃やし続けた。しかし、上位進出の夢を果たせないまま、今年の8月下旬下関地区大会でのベンチ采配を最後に、9月6日風邪から肺炎を起こし、持病の肝炎が悪化し、肝不全で10月8日未明にこの世を去った。

私が見舞いに自宅を伺ったのが9月16日、熱も下がり食欲も出てきたと言っていた。元気になれそうに思えたのに、誠に惜しい人材を失った。彼の指導は、勝てば生徒を誉め、負ければ自分の責任とし、決して生徒を叱ることはなかった。葬儀には多くの教え子が参列し、ともに冥福を祈った。

私の休職中の昭和28年に、クラブ活動としての剣道が占領軍から許可され、各所で剣道が復活、町道場でも竹刀の音が聞こえるようになった。昭和30年から出校の準備のため、夜町道場に通った。復職して10月には5段昇段試験に合格。時々剣道部員の稽古台となったが、バスケットのチームゲームの面白さにとりつかれ、本格的に剣道に帰る気にはなれなかった。

昭和28年29年と、男子は大津高校の全盛時代が続き、インターハイ連続出場、30年は先ほど述べた防府商業が県代表となった。昭和31年のインターハイ予選は、新設された大嶺高校体育館で実施され、その際は長身でテクニックに優れた山田君が徳山高校を優勝に導いた。豊浦は準決勝で、彼にリバウンドを取られ敗れた。山田君は卒業後、協和発酵の中心選手として活躍した。

話題は復職当時に遡るが、30年4月に1年生の体育の授業を受け持つことになり、都合良くバスケット経験者3名と、学業成績も優れた体格も良い部員5名、計8名を勧誘することができた。しかし練習は、22×11mの狭く天井も低い体育館を、剣道部復活で半分ずつ使うことになり、狭い上に剣道の稽古の竹刀やかけ声のために話もできず、全く閉口した。その中で文武両道を目指し、短時間で能率の上がる練習を強いられた。オフェンスではカットインプレイ、ディフェンスでは今はやりのディナイディフェンスをパスゲームで練習し、剣道が終わってのわずかな時間だけオールコートを走り回った。毎日練習はしたが、2時間以上は、生徒も両立に努力してくれた。

その結果、31年の光高校（現在の武田薬品体育館辺りにあった）で行われた新人戦には勝ち、32年の春季県体では私の選手起用で負けたが、インターハイ予選では、準々決勝で大津高校を、準決勝で萩高校に辛勝し、決勝では春季県体で敗れた柳井高校に1点のリードも許さず完勝した。また、進学の結果も良く、国立大学に3名、私立大学に2名、残り3名は就職をした。これが復職して3年目でやっと果たすことができた、私の夢の第一歩であった。

【第4回】

昭和32年8月、第10回全国高等学校バスケットボール選手権大会は、長崎で開催されることに決まっていたが、長崎県を襲った風水害のため、急遽、東京に会場変更となった。学校は校舎改築でてんやわんや、地元負担金3分の1の捻出で、経済的にも苦しい時代であった。当然生徒会予算も少なく、全国大会出場のための予算枠など随分と少なかった。全国大会には、バスケットボールのほか、陸上、体操、剣道と出場する部、選手も多かった。資金集めに、生徒会がカンパをしてくれた。選手の個人負担も相当なものであったろう。

初めての出場で、全国のレベルが皆目わからない。怖さも知らずに、全校生徒から祝福を受け、私と12名の選手は、広島で列車を乗り継ぎ、やっと座席を確保、東京に着いたのは試合の前日、神田の宿舎で大津高校の女子と一緒にあった。監督水嶋先生のほか、教頭の相原先生が引率されていた。どちらのチームも先輩の応援者が度々訪れてくれていた。

試合相手は、甲府一高校で、うまく行けば勝てるのではないかと思っていたが、何せ初出場、全員経験不足で、前半は相手のマンツーマンディフェンスをよく攻めたが、後半ゾーンを敷かれ、外角のシュートが全く入らず、何を指示したのかすら記憶にない。全員固くなって、34対50で負けてしまった。大津高校の応援に行ったが、高崎市立女子高校のハーフコート・ゾーンプレスに悩まされて、敗れた。男子は松江工業高校が、準優勝。女子は、安来高校、総社高校が第3位と、中国地区のレベルは高かった。

せっかく東京まで来たということで、各チームとも観光バスを利用して、東京見物をした。翌日、私は落ち着かず、3年生を先輩の大学生に預け、日光に行かせ、私は2年生を連れて、上位のゲームを見学するために出かけた。何かを学びとろうと、優勝した武蔵高校の試合をじっくり見た。よく動き走り、ボールを持てばトラベリング寸前の紛らわしいプレイをした。その上ゲーム中にいっさい飲み物を口にできなかった。それに、私も生徒も感動した。単純ではあったが、生徒の納得したことは、よく動き走り、水を飲まないことであった。

帰校して、水を飲まない、走れ走れの練習が始まった。トラベリングについては、私に教える自信がなく、際どいプレイには手を付けなかった。3年生は進学などのために5名引退し3名が残った。2年生と1年生の学校残留組と合わせて14名である。1年生は面喰らうことが多く、ただただ上級生の練習に

ついてくるのがやっと。当時の3年生の、卒業後の思い出話に、「汗を拭くタオルを水に濡らし、汗を拭いてはタオルをすすった」とその当時の苦しさを語ったエピソードもある。練習は倒れる生徒もなく、スムーズに続いた。秋季県体は山口の自衛隊体育館で行われ、走れ走れで優勝できた。

日本バスケットボール協会では、昭和31年第16回オリンピックに選手を送り、10位であった。この頃から国際試合も多くなり、選手強化にアメリカコーチを招いた。ナットホールマン氏はその一人で、山口県協会は32年12月に彼を講師として招聘し、帝人岩国チームを練習台に、2泊3日の技術講習会を米軍岩国基地内の体育館で開催した。

受講者は、三戸理事長、他水嶋、和佐本、藤谷（帝人岩国監督）の各氏のほか数名、県外からも、荒井氏（名古屋経済大学監督、当時は安来高校コーチであった）の他、近県から2、3名、合わせて20名程度が受講した。私も、米国人からの指導は初めてで、参考になることが多く、シザーズプレイについては特に印象が深く、その後のチームオフenseに取り入れた。

一方、学校の校舎改築も徐々に進み、裏グラウンドは業者の手を煩わすことなく、失業対策事業として、プールと整地とを完成、バレー、テニス、バスケットボールの各2面を作成した。狭い天井の低い体育館から、暇を見つけて、夕方の風のおさまった時を狙って、シュート練習をした。

しかし、33年3月から5月末にかけて、関門トンネル開通記念下関水産博覧会が、下関水族館を中心に開催され、プールを含む裏グラウンド全体が、その会場となり、約半年間使用不能となった。当時の体育主任、竹内武夫先生は、学校、市、県の間立ち、ご苦労ご心痛は大変であったと推察できる。現在の豊浦高校の体育施設の基礎は、この頃に作られたと言って過言ではなかろう。

このような状況の中で、昭和33年度は小兵の集団ではあったが、5月の中国大会で松江工業に敗れたものの、6月の全国選手権大会山口県予選に勝ち、仙台のインターハイに出場したが、長野商業高校に、58対50で敗れた。優勝した山城高校のゾーン・プレスを観戦したが、豊浦のフォーメーションに似て居り、大変参考になった。女子の熊毛南戦は、暇が取れずに応援にいけなかった。

帰校後私は直ちに、体操競技インターハイ応援に、長崎に向かった。竹内先生率いる鍋井邦久（県教育委員会勤務）三浦薫（豊浦高校勤務）などの選手は、団体総合7位となり、個人種目平行棒で鍋井が優勝した。

昭和34年は、学校が創立60周年を迎える準備で忙しく活気に満ちていた。バスケットボール部は、昨年からのレギュラーの橋浦（中央大学で活躍）秋山（帝人岩国で活躍）の2名のほか、梅野（元長府高校コーチ）等の能力のある7名と、下級生5名でチームを作った、下級生には、小兵ではあったが、国領（新日鉄光で活躍）が居た。そこで、オールコート3-2のゾーンプレスと、シュート・アンド・フォローの早く力強いプレイで大飛躍を考え、練習を重ねた。

だが、年度初めの中国大会県予選に、ポイントガードのキャプテン後藤を指の負傷で、ポイントゲッター橋浦も前半に5ファールで失い、思いがけなく、準々決勝で徳山商工高に敗れた。中国大会にも出場できずに、選手に惨めな思いをさせた。

大飛躍よりも足元からと、急遽練習計画をセット・オフenseに重点を置き、インターハイ予選に向けて調整した。第12回大会予選は、決勝で宇部商業高校を破り、熊本に行くことになった。しかし、こちんまりとまとめため、勝つチャンスは度々ありながら、札幌北に42対40のわずかの差で敗れた。女子

は天津高校が出場したが、飯田風越高校に敗れた。

下関から近かったので選手は翌日帰し、私は何か良いゲームはないかと見て回ったが、収穫はなかった。審判研修に、吉村且氏（協会副会長）藤村健治氏（長門高校副校長）中村豊継氏（防府養護学校校長）が参加していた。水嶋哲夫先生（当時、山口県協会審判長、天津高校教諭）達と共に、帰途、杖立温泉に一泊休養して帰った。

秋の国民体育大会は、高校男子各県1チームが出場できるので、県予選に勝ち、宇部商業から桑原（宇部高校勤務）と岩井、防府高校から伊藤の3名を補強して、東京に出た。良いゲームをと思い、中野の宿舎の近くにあるお寺の広場で、体調を整えようと軽い体操とパスをしていたら、「無断借用」だと掃除のおじさんに、それはひどく叱られた。試合は宇都宮工業に、60対54で敗れたが、内容はほとんど忘れ、叱られたことだけが記憶に残る。当時、宇部商業高校に勤務されていた柏村勝先生（長らく高校体育連盟バスケットボール部専門委員長を務められていた）が、応援にきてくださった。

国体の決勝戦は、東京代表の中央大学付属杉並高校がインターハイ優勝、その上補強してさらに大型化し、下馬評では優勝間違いないといわれていたが、京都代表単独チームの山城高校に完敗した。2年の国領を連れて観戦し、山城高校の勝ちには共に驚嘆した。国領の熱心な見学や執着心には、心を動かされた。彼は卒業後、新日本製鉄光に入社し、黄金時代を作ったのもなるほどと頷ける。

昭和35年には、長府中学校に体育館が建ち、中学校が使用しないときに使わせていただいた。正月の2日には、この体育館で、現役対OB戦を始めたのもこの頃からで、2日のゲームを終えたOBは私の家で酒を酌み交わし、現役チームの発展を祈った。試合会場は事情で転々としたが、私の家での行事は続き、昭和50年頃には一日でさばき切れず、3日、4日に渡り、延べ50人にも達した。合宿練習にも、妻が炊事を引き受けてくれたこともあり、一家をバスケットボールに巻き込んだ。

練習ゲームは時々日帰りで北九州市に出たが、特定のゲームはなく不満足であったので、佐賀高校の野口七郎先生（学生時代の先輩）に頼み、佐賀高校の合宿する宿舎に1泊2日で二度合同練習に出かけた。佐賀高校はピボット・シュートがうまく勉強になった。伝統あるチームで、精神的に優れ、気の抜けた練習やゲームをすると、昼食抜きでグラウンドを走らされ、午後のスケジュールに入った。生徒は見違えるほど気力が充実し、頑張った。私達は、水を飲まず練習とゲームをする以上の厳しさを学んだ。

中国大会は3位になり、福井の全国高校選手権大会には優勝候補の蔵前工業高校にゴール下を支配され、76対56で敗れた。宇部学園（のちの宇部女子高校、現慶進高校）の活躍は目覚ましく、2-3の小さいゾーンからの速攻が冴え、高崎市立女子高校、上田染谷丘高校に勝ったが、3回戦では静岡精華高校に敗れた。

豊浦は3年連続インターハイに出場したが、その壁は厚く、どうしても1回戦を突破できなかった。しかし、この年を顧みると、今まで一度もできなかった県内完全優勝を達成することができた。平均身長170センチにも達しない小兵の選手たちで、大変良く活躍したと思う。

【第5回】

昭和23年からチームを指導し始めて10年、昭和32年8月の第10回全国高等学校バスケットボール選手権大会の初出場までは永かった。

それから第11回、12回、13回と連続出場はしたが、1回戦突破はできなかった。女子は宇部学園

高校が第13回大会で、初出場ながら2回戦を勝ち抜いて、ベスト16に入ったことは前回に述べた。

第5回は、昭和36年頃から書くことになるが・・・

実は南風編集部から、三田尻女子高校の第45回インターハイにおける目覚ましい活躍を紹介して欲しいとの要望があり、同高校が準々決勝に進出した様子をまず書くことにする。

私が今夏の宮崎インターハイを観戦しようと決めたのは、県予選が終わった直後であった。山口高校、三田尻女子高校は共に近来にない力のある山口県代表チームで、中国大会でも輝かしい成績を収めており、全国大会ではかなり活躍するものと期待を持たせた。その上、会場が延岡、日向と下関から近く、一昨年仙台インターハイでの準々決勝を見学して以来の全国大会で、精神的にも若返りたい、新しいバスケットに触れてみたいという気持ちが強かった。

以上3点の理由から、当初は2回戦、3回戦、準々決勝の好ゲームを見る予定にしていた。6月始め、延岡、日向の宿舎を風潰しに電話をかけたが、全て断られ、仕方なく妻高校の重永先生（宮崎県協会副理事長）にお願いしたら、運良く8月3日の宿舎が取れた。山口先生（長府高校）兼田先生（早輻高校）と一緒にいくことになった。

組み合わせを見ると、三田尻はシードされて好位置に居たが、山口は余り良い位置には居なかった。新聞などの予想では、評価は低く、共に2回戦突破は難しきろうとのことだった。宿泊の関係上、3回戦、準々決勝しか観戦できなくなったので、河上氏と小松先生には頑張ってもらって、是非1、2回戦を勝ち上がってくれるように頼んだ。

下関を8月3日の早暁に車で出発した。

山口高校は残念ながら、静岡興静高校に1回戦で惜敗し涙を飲んだ。三田尻は2回戦東京成徳高校を降し、3回戦進出は連絡を受け知っていた。

午前中は、男子会場で試合を見学し、午後三田尻の応援に行った。男子会場では、能代工業高校を東北大会で降した仙台高校はどのようなチームだろうと興味をもって観たが、洛南高校の高さの前に敗れた。得るところもなく失望した。

女子会場の日向文化交流センターは、冷房が効いた小じんまりしているが立派な体育館であった。三田尻には保護者の応援団が数十名もおられて賑やかであった。専門委員長の枝折先生（柳井工業）や県教委の浜村課長、藤井係長が応援に来ておられた。

3回戦の相手、神奈川県代表の富岡高校は、かつてはインターハイ優勝の経験を持つ常連校で、1回戦米子東、2回戦高松東を降し、余力をもって3回戦に進出したチームで、上背もあり、三田尻不利と予想されていた。

蓋を開けてみると、三田尻はスピードに勝り、攻めては速攻とシュートの切れ味鋭く、守ってはゾーンと、マンツーマンの使い分けが良く、富岡に計画的得点のチャンスを与えず、前半を35対19と優位に立った。

後半になって三田尻のチェンジングディフェンスに慣れて、富岡は攻めのペースを取り戻し、残り5分に4点差に詰めたが、三田尻は落ち着いて岡本、鳳山がシュートを決め、6点差の59対53で富岡を降した。三田尻の岡本が快調で、彼女の内外角シュートが光った試合であった。しかし、三田尻対富岡戦は3回戦の最終ゲームであり、4日の準々決勝は第一ゲームに組まれており、疲れが明日に残らなければいいがと不安に思いながら、宿舎の延岡に帰った。

4日は男子ゲームを見学せず、女子準々決勝総てを見ることにして、宿を出た。

三田尻は優勝候補の中村学園（福岡県）と対戦することになっていた。春の練習ゲームでは三田尻が勝っている。三田尻に勝つチャンスはあると見たが、中村学園の韓国からの留学生ポイントガードの李は落ち着き、三田尻の得意とするチェンジングディフェンスに惑わされず、同じ韓国の崔とのコンビもよく、内外角からよく決め、43対27と中村リードで前半を終えた。

後半になって、三田尻も踏ん張り、西本、鳳山の活躍で8点差まで詰め寄ったが、岡本の不調と、小兵ではあるが、切れのよい動きでゲームのリズムを作る重田、小林の膝の故障が響き、81対62で大型チーム中村学園に屈した。

中村学園のほかに、新居浜商業高校、東亜学園高校、名古屋短大付属高校が4強に残った。各チームとも、中国地区のミニ国体で優勝した山口県少年女子チームより、やや大型で、良く洗練されていた。個人では、東亜学園の大山が目立った。

帰宅して、山口県高校女子チームの過去の成績を調べてみると、昭和26年広島国体で熊毛南高校がベスト8進出を果たしているが、他にはなく、インターハイ始まって以来の最高位で称賛に価する。最近の上位チームの傾向は、他県からも、中には国外からでも選手を集めて強化する方向にある。その中で、通学可能な範囲の生徒で、これまでチームをまとめ上げた三田尻女子の小松先生には本当に頭が下がる。

さて、話題を「豊高での40年」に戻す。

4年間連続で平凡な成績のインターハイではあったが、良いゲームを見学し、沢山の指導者に接し、誠に勉強になったような気がする。

昭和36年3月、第13回インターハイの第1位、2位チームの学校を視察する機会に恵まれた。

中央大学附属杉並高校で野口先生の指導を見せていただいたが、東京都以外からのバスケット留学の生徒が数名いることに驚いた。また、静岡高校では練習を見学できなかったが、馬渡監督のお話を伺うことができた。諸先生方の理解と協力により、部員の学業の成績も優秀、監督の指導力に目を見張った。東京教育大学女子バスケット部が、35年度インターハイ2位の静岡静華高校で合宿をしていると聞き、合同練習を見学に行った。唯、黙々と基礎練習に励んでいた。基礎練習の大切さをあらためて知った。

帰校後、萩高校の上野校長先生の提唱で、萩高校を練習会場にして、豊浦高校と萩地区高等学校の合同練習を5日間実施することになった。萩高校の当時県協会の審判長であった水嶋先生と萩商工の藤井先生（厚狭高校勤務）と共に、走れ走れの猛練習を生徒に強いた。豊浦は学校の近所で宿泊し、他の生徒は通いであったので、解散後、単独で練習を重ねた。生徒は疲れていたが、日頃正規のコートで練習をしていないので張り切った。

合宿を終えて帰校後、1日の休養を取り、新3年生5名、2年3名で、福岡、佐賀、熊本、大分に3泊4日で試合に出た。一番の長身者が175センチ、全員小兵で全試合オールコート、3-2のゾーンプレスで終始した。最終の大分舞鶴戦では、倒れる生徒が出たが、気力だけで戦った。各県1・2位のチームとの試合は4勝6敗で、当初の予想を上回り、随分自信を付けた。

昭和36年度の山口県高体連バスケットボール部は、宇部商業高校の柏村先生が委員長であり、先生を中心に現在の組織と同様に運営されていた。しかし、全国高等学校選手権大会（所謂インターハイ）は、現在の高校総合体育大会の形を取らず、各専門部単独で、各種目まちまちの会場で開催されていた。

県高体連バスケットボール部では、昭和37年度に第15回インターハイを宇部で開催しようと決議、全国高等学校バスケットボール部総会で決定を見るべく、各地に説得に動いた。私は柏村先生と一緒に関東各県の代表者を訪ねた。宇部に内定したのが7月はじめ、14回大会青森の審判研修会には、柏村、水嶋、和佐本先生が参加、日本バスケットボール協会の河合、畑講師はその熱意に驚嘆された。選手権開催中の、専門委員長総会で正式に満場一致、昭和37年8月宇部でのインターハイ開催を決定した。その席には、宇部市教育長も出席され、決定の御礼と開催の決意を述べられた。

豊浦高校は昭和36年8月の青森大会には、県予選を難無く通過したが、国鉄寝台車にも乗れず、青森行きの車中2泊は長かった。

1回戦は福島県代表の磐城高校。最初から抜きつ抜かれつの接戦で、残り10秒くらいあったろうか、相手ゴール下でヘルドボール。その時76対76の同点。我がチームは172センチの斎藤がジャンプ。相手は180センチ位の選手であった。斎藤はサージャントジャンプ90センチでリングをつかむ。ジャンプボールは勝てると閃いた。すぐタイムアウトを要求。タップする場所を右ハーフラインに決め、守りのポジションから右の一人をギャンブル走させた。計画通り、ドリブルインシュートで2点を取り、タイムアップ。劇的な勝利であった。インターハイ5回目で、初めて1回戦突破ができた。その夜のねぶた祭には生徒の外出を許した。だが、食事の管理を忘れた生徒が、鮎を食ったらしい。明るる日の2回戦には、レギュラー2名が下痢、発熱で試合に出られず、鳥取工業に76対56で大敗した。生ものを口にするなどは注意していたものの、生徒と行動を共にしなかった私のミスであった。

女子は宇部学園が、1回戦で佐賀清和に44対29で勝ったが、2回戦、美須ヶ丘（長野県代表）に60対52で敗れた。どちらも応援に行けなかった。

青森まで来てすぐに帰るのもと思い、日頃の苦しい練習のご褒美にと北海道へと渡った。札幌、洞爺湖、昭和新山と観光し、最終日の3位決定戦と決勝戦を見学し帰路についた。優勝した中大付属杉並の江川の活躍と、3位になった松江工業の堅いマンツーマンディフェンスが光っていた。

昭和37年の宇部インターハイに続いて、昭和38年の山口国体のバスケットボール会場が宇部市と防府市に決まり、まさにダブルの忙しさが訪れた。水嶋先生を中心に県内審判講習会、柏村先生を頭に宇部での運営会議など開催の準備も着々と進行していたが、昭和37年3月の県教育委員会人事で、柏村先生は新設の美祢工業に転勤された。私は宇部工業に行くことになっていたとか。豊浦高校の小川五郎校長は厳として首を縦に振られず、私は何も知らず、後日真相を聞いた。

柏村先生の転勤により、高体連バスケットボール部も急遽下松工業の布施先生を専門部長に、宇部学園の上野先生を宇部地区委員に選んだ。

第14回青森インターハイから帰って、新チームの練習を2年生2人1年生8人で始めた。中学校時代の経験者は5人で、全くチームにならず、秋季大会は3年生3人に手伝ってもらったが敗れた。

期待していた2年生の一人が12月に退部。全く見当もつかないチームになり下がってしまった。市内大会でも、下関商業、下関西にも勝てず、その他とも接戦する始末。春休みには学校で一週間ほどの強化合宿をした。

長門地区大会では最低シードを、県新人大会では何とかベスト8、中国予選はベスト4まで、インターハイ予選では5チームのリーグ戦に入るまでと、目標を立て相手を想定しての計画練習が見事に成功。

ついに5強に残った。

インターハイ最終予選は、下関西、宇部商業、防府商業、岩国、豊浦であったろうか、ぶっつけ本番だったが、4勝して1位となる。誰も想像しない結果であった。

しかし、第15回宇部インターハイでは完敗。山口県勢は、女子の香川学園が1回戦を突破したのみで、男子の宇部商業、女子の宇部学園にとっても1回戦の壁は厚く、大会関係者をがっかりさせた。

男子決勝戦では、渡辺晴夫先生の率いる松江工業が、派手な中大付属杉並を破り優勝した。

【第6回】

昭和37年の宇部インターハイは、県下各大会毎に計画的な練習が功を奏し、出場できた。しかし、本番では1回戦で敗れた。

だが、その1年間を振り返ってみると、3年生の秋山正義（故人）と他は2年生でこのような結果を出せたのは全く不思議である。毎日の練習を黙々と中心になって推進してくれた秋山を賞賛したい。

彼は長府中学校出身で、1年次4人の新入部員中身長最低、技術も未熟であったが、練習を休むこともなく、1年次に2名退部し、2年次には、昭和36年青森インターハイに共に参加した同僚1名も進学との理由で退部し、上級生は彼一人となりキャプテンとなった。私は彼を1対1で鍛えた。彼はチームの模範として下級生を引っ張った。学業成績も上位に躍進し、山口大学に進学、大学では当時中国最下位を低迷していたチームの上昇に努め、昭和43年度全日本学生選手権出場の基礎を作った。

昭和42年3月大学卒業、豊田西中学に就職した。10月末友人の車に同乗、交通事故で宇部医大に収容されたが此の世を去った。当時豊田西中学校には、バスケットスタンドがなく思案していたので、豊浦高校の老朽化した木製のスタンドを一對贈った。だが、これもほとんど使うこともなく、彼の磨いた腕を発揮することもなく亡くなったことは、未だ以って誠に残念である。

さて、昭和37年の宇部インターハイが終わり、昭和38年10月開催の山口国体にむけて総てが動き出した。

新チーム最初の試合は、昭和37年8月の長門新人大会だったが、決勝で64-48で宇部商業に勝った。

昭和38年度の山口県高体連バスケットボール部のスケジュールを拾ってみると、国体強化合宿（4月上旬）、中国高校県予選（4月中旬）、春季県体（5月中旬）、インターハイ1次予選（6月中旬）、インターハイ2次予選（6月下旬）、第18回国体（10月下旬）、周防・長門新人大会（2月）、新人大会（3月）の様になっていた。

4月の合宿は、高校生男女の上位3チーム各10名計60名と、県教員チームが宇部青年の家に合宿し、俵田体育館に通い、日本大学監督の辻村先生の指導を受けた。宿舎と体育館はかなりの距離があり、車を利用する人が多かったが、私は生徒と共に走って会場を往復した。まだ若かったし、私の気力はまだ充実していたものと思う。

中国大会に出場し、鳥取西に勝ったが松江工業に敗れた。

春季県体に勝ち、国体2次予選の出場権を得た。2次予選では1次予選の勝者4チームとリーグ戦で戦い、宇部商業に56-37、岩国に77-42、防府に66-43、下松工業に89-55と4勝し、インターハイ、国体の出場が決まった。昭和37年4月から勤務された片山先生（下関商業教頭）と共に苦勞した結果

で、新潟県の三條まで、中央線、長野経由の苦しい旅であった。

三條では民泊で分散した。布施先生（高体連専門委員長）と水嶋先生（県審判長）と同宿で大会運営などの話を伺い、自分の勉強にはなったが、生徒の監督は充分にできなかった。三條の夏は異常に暑く、特に日中は厳しかった。生徒は日頃かなり強度の練習で、体力には自信をもっていたので、私は民泊で各自のコンディションの調整が好ましくないのを試合前の練習で合わせようと、かなり強度の練習を強いた。日頃練習中には水を飲まないが、休憩時間のゲームを観戦する前に、選手は水分を取り過ぎ、ゲームが始まっても動きが鈍く、攻めては汗でボールが滑り、キャッチが思うようにいかずミスが続出、守ってはファールを重ね、前半41-19と大きくリードされた。後半は控えのメンバーで戦わねばならず、高崎工業に68-39で完敗した。監督としての私の不手際が惨めな結果を生んだ。他のゲームを見学することもせず、鈍行で東京経由直ちに帰省した。

女子は防府商業の藤山先生（美祢高校教頭）の努力が実を結びインターハイに出場したが、56-26で松本蟻ヶ崎に敗れた。

国体のための練習は、盆も返上して、中学校の体育館を借り歩いた。直前には光で教員団と合同合宿をし、県下実業団とも度々練習を重ね本番に臨んだ。

インターハイで不甲斐ない成績で終わった豊浦は、出場12チームのどこに当たっても勝ち目がないと考えたのだろう、日本協会は1回戦不戦勝、2回戦は中央大学付属杉並高校との対戦を組んだ。

ゲームは日頃から練習を重ねていた3-2のゾーンプレスを交えた、走れ走れのバスケットで、一時はリードする場面もあったが、後日、全日本のエースとして活躍した谷口に32点を許し、67-49で敗れた。豊浦では浜田和男（下関教育事務所）の16点が最高であった。

中大杉並は優勝した。

山口国体も終わり一安心。しかし3年生8名を送り、休み暇もなく新人戦を迎え、やっと勝てたので、39年度末には、2年間休んだ九州遠征を2泊3日で強行した。

いろいろな無理が重なり、3年生のエースセンターが膝を痛め、3年生2名と、他は下級生で、中国大会県予選、インターハイ予選に臨んだが、良い成績を収められなかった。

昭和39度のインターハイは防府商業が出場したが、1回戦で敗れた。

10月東京オリンピックが開催されるにあたり、私はアメリカ人コーチ、ピート・ニューエル氏が直接コーチしている日本ナショナルチームの練習を見学する機会を得たが、校務多忙で、オリンピックは観戦にいけなかった。本県からは、水嶋先生が役員として参加された。

秋季県体では、各種競技の総合得点方法による第1回の教育長杯表彰が実施されることになった。

バスケットは小林正（下関東部中）等2年生7名と1年生でチームを編成し、1日目を勝ち、競技場の合宿所に泊まり明日の試合に備えた。教育長杯得点の中間情報が入り、豊浦は上位にあるとのこと、そこで一層奮起し、決勝はインターハイ出場の前防府商業を破り、優勝。陸上、体操も1位で第1回の教育長杯は豊浦のものとなった。

40年2月には、学校保健体育優秀校として文部省より表彰も受けることとなり、私は上京した。

昭和40年度のチームは、前述したように、秋季県体から始まった。1年生に木屋川中学出身の野球経験者で、190センチある門田敏治が入部した。今まで、リバウンドに泣いた私は、どうにかレギュラー

に加えたいと考えていた。技術は拙く、ミスも多かったが、目をつむってゲームに使うことにしたが、持病の貧血症があり、無理ができず徐々にならした。

防府商業は、新人になっても戦力がほとんど衰えず、原田、吉村の2名は特に優れていた。2月の新人戦には80-49と防府商業に完敗したが、余り気にせず、一途にゲームの向上にと、3泊4日で福岡、熊本、大分と7ゲームをした。

途中、阿蘇青年の家の1泊2日は、青年の家の行事に全て参加し、他団体との交流もあり、和やかな中で疲れの回復と、福岡、熊本のゲームの反省練習をした効果があり、大分での好ゲームを生んだ。6勝1敗で、3-2のゾーンディフェンスにかなりの自信を付けた。

また、昭和45年から県下各高校で実施された集団宿泊を、先取りした形での阿蘇青年の家の経験は、私の大変良い勉強となり、豊浦の集団宿泊の計画実施にも貢献することができた。

4月に入り、中国大会県予選、春季県体と防府商業に敗れた。中国大会は下関で開催され、2回戦で松江工業に63-51で負けたが、やや満足の行くゲームであった。インターハイ予選は3年2年の噛み合いがよく、気力も充実し、防府商業を破り、長崎インターハイに出場することになった。

長崎では、1回戦盛岡工業の練習を見学に行った。私が見ているとも知らず、他チームと練習ゲームを始めた。これ以上参考にするものはなく、十分な作戦を立て試合に臨み、前半半ばで20対11とリードし、結局68-52と快勝した。2回戦も磐城高校に1度もリードを許さず、75-66で3回戦に出場することになった。

対戦相手の蔵前工業は優勝候補シードの一角にあった。前半12分には25-23とどうにかできると思ったものの、ファウルがかさみ、4人の退場者を出し、四つに組むことができず、85-62で敗れた。豊浦のエース和田猛則は3試合で64点稼ぐ、大活躍を見せた。

当時、長崎に勤務しておられた島田浩三氏（島田商店社長）は、3試合を応援して良くやったと、中華料理店に全員を招待して慰労してくださった。

上野先生の率いる宇部女子は、1、2回戦を勝ち、3回戦で滝野川高校に敗れた。しかし、男女ともにベスト16に入った。

第18回長崎インターハイが終わり、3年生は体育系に進む小林正を残して6名引退、次回のインターハイ上位を目標に練習に入った。

9月の国体中国予選は、国泰寺、米子東、倉敷工業に勝ち、松江工業に77-50で負けたものの、来年にむけてやや自信がついた。しかし、門田の体調は充分とは言えず、1試合続けることが困難で、練習もゲームも彼の調子に合わせて計画しなければならず、天井の低い狭い体育館での練習は、短時間で合理的に練習量を稼ぐ基本的なもので、ボールの貰い足と、それに伴う幅広いプレイの習得を狙い、ポジションを固定せずに、全員同じように3-2のゾーン、マンツーマン、プレスディフェンスに取り組み、練習の流れを大切にした。

ゲームは、門田が入れば、ゾーンディフェンスにセットオフenseとし、他はゾーンプレス、マンツーマンプレスに速攻を中心とした5人のフリーオフenseを考えて、北九州で練習ゲームを重ねた。

5月の中国大会は広島で開催され、1回戦戸手商業を71-45と下し、2回戦は三刀屋を74-3

9, 準決勝は66-59, 決勝では松江工業を62-58と破り、初めて中国優勝を果たした。

インターハイ県予選では、門田が捻挫、痙攣を起こし、決勝では57-55で徳山に辛勝した。片山先生のスコアブックに残る当時の感想によると、「一般的に徳山のシュートの調子が凄く良く、遠くからの思いがけぬシュートが良く決まった。しかし、得点差ほど苦しい試合ではなかった。」と記されている。

第19回インターハイは秋田で開催された。駅頭には竿燈祭りの提灯がたくさん並んでいた。

宿は辺鄙な田舎旅館であったが、遠慮がなく自由に振る舞えた。門田は夏に弱く、お母様も心配で応援に来られた。私も最高のコンディションで試合に臨みたいと、開会式には門田を宿に残して参加した。

1回戦札幌西を72-60, 2回戦藤島を67-63, 3回戦学習院を65-53と下したが、準々決勝の札幌光星戦は途中まで有利に試合を進めながら、残り3分に55-55と並ばれ、57-60で敗れた。相手のゾーンディフェンスに対し、外角のシュートを落としたのが大きな敗因であった。

昭和56年から7年間、豊浦のコーチを務めてくれた吉永兼夫氏は、当時の選手で、4試合合計65点を稼ぎ、「月刊バスケット」でのインターハイ優秀選手ベスト10に選ばれ、卒業後同志社大学に進み、ガードとして、全日本学生選手権で昭和44年5位、昭和45年2位の成績を収めた。門田も立教大学で活躍した。

また、昭和50年頃から、ミニバスケットの世話をしてくれた小林清（勝山小）も当時のメンバーだった。

3年8名は、インターハイ終了後引退し、新チームに変わった。国体中国予選は、3年生が手伝ってくれたものの、練習不足で松江工業に敗れ、3勝1敗で国体出場は果たせなかった。

【第7回】

昭和32年度インターハイに初出場し、昭和41年の第19回インターハイまで途中一度だけ防府商業に出場を譲ったが、この第19回インターハイでやっとベスト8に進出することができた。私も41才になり、脂の乗り切った時期でもあったろう。

当時の県協会は、三戸雅之氏（個人）を理事長に、副理事長を白松寿人（元西京高校長）、総務委員長を中村豊継氏（元防府養護学校長）、審判委員長を水嶋哲夫氏（元大津高校監督）、競技委員長を和佐本生男氏（元熊毛南高校監督）、渉外委員長を上野学氏（元宇部女子高校監督）、技術委員長を私が務めていたが、協会、高体連専門部とも経費が少なく運営が苦しく、競技会を開催しても、役員は手弁当で持ち出すことが多かった。苦肉の策として、資金集めに協会のタオルを作り、販売をした。

昭和41年から機関誌の発行を始め、機関誌代を各チームからいただき、資金集めと、バスケットボールの普及、発展へと踏み切った。その機関誌は私が引き受け、豊浦高校の副顧問であった片山隆剛氏（豊浦高校教頭）にガリ刷り、製本をお願いして、年2回の発行を昭和48年まで続けた。

昭和49年以降、新たに情報宣伝部を新設しバトンタッチしたものの、機関誌代徴収だけが残り、発行は途切れてしまった。

昭和42年待望の体育館が豊浦高校にも完成した。チームも大きく伸びることができると思ったが、3年生のセンターが生徒会長に選ばれ、ガードが心臓弁膜症で退部、残るは山本和久（高水高校男子監督）、藤井房雄（元彦島中学校）ほか2名で、2年生の補充を余儀なくされた。

折しもおり、学校食堂問題が裁判沙汰に発展し、インターハイ予選前2ヶ月間ほとんど練習に顔を出すこともできず、決勝で浜村先生の率いる経験豊かでシュート力に勝れた宇部商業に敗れた。選手に申し訳なく、誠に残念であった。

その頃、日本ナショナルチームが世界選手権に出場し5位に入賞した。そのメンバーに山口県出身の林早苗（田部高校出身）角谷郁子（宇部女子高校出身）が居た。林からは今も年賀状が届く。

昭和43年度は新体育館での練習は楽しく、いろいろと教えることなど多く、毎日ハーフコートが使用でき、チームオフェンスを中心に練習を重ねた。勝てると思ったインターハイ予選では、宇部商業のオールコートディフェンスに敗れた。悪い環境から立派な練習場に移動してのことで、練習は如何にあるべきかを考えさせられた。

昭和44年度は、宇部商業のことを頭において、毎日の練習に臨んだ。インターハイ予選では、宇部商業を準決勝で、今までほとんど試合に出していない2年の185、182センチある長身の大型選手を使って、リバウンドを制し60対46と勝ち、決勝も防府商業に72-52と圧勝した。

しかし、宇都宮でのインターハイは、83-58と三條に完敗した。

この大会で2位になった浜松商業の選手数名が、私達の宿舎にきて大分舞鶴の選手の一部始終をメモして帰った。コーチの指示かは知る由もないが、驚きとともに感嘆した。宇都宮からの帰り、熱海の豊浦の先輩の経営する中野ホテルに一泊、学校の伝統を教えた。

新チームで国体予選に臨み、決勝で下関工業に勝ったが、秋季県体では敗れた。当時、下関工業は、渡辺（日立笠戸重工）小泉（下関工業監督）が活躍していた。

長い間、大型チームを夢見ていた私は、市内中学校で活躍していた川武利和（彦島中）徳永泰男（日新中）をガードに、田中武（文洋中）をセンターに、黒田和博（川中中）をフォワードに置き、他4名でチームを構成した。

前述したように、下関工業に秋季県体では敗れたが、それ以外は全く県下敵なく、インターハイ予選では、決勝で下関工業を3-2のハーフコートのゾーンディフェンスで83-38と圧勝した。

中国大会では、準決勝で松江工業を接戦の末破ったが、スタミナ切れを精神力でカバーできず、県立広島工業に負けた。

昭和45年第23回インターハイは、和歌山で開催され、1回戦は海南高校、2回戦は葺合高校、3回戦はシード校の武蔵高校を58-57の1点差で破り、ベスト8に進出したものの、後日ナショナルチームのエースとして活躍した桑田健秀の居た慶応高校に敗れた。一生懸命に守らせたが、彼に36点もの高得点を許した。

女子は、久しぶりに宇部女子を破った長府が出場したが、1回戦止まりであった。

第19回インターハイと、今回の2度にわたり、全国ベスト8に進出したメンバーは、下関市内出身者で、幸いにも市内の良い選手の半数程度の集団であったことを考えると、市内だけでもまとめ、それが大型化できたときには、練習次第で、全国上位レベルに到達することができる自信を持った。

帰りは、大阪の日本万国博覧会を全員ゆっくり見学した。

盛岡で開かれた国体にも参加したが、進学校の共通な悩みだが、インターハイ後は十分な練習もできず、1回戦で敗退した。

毎年春休みに九州遠征をし、多くの皆様にお世話になりチームも成長してきたが、思うように日程も組めず、経費もかさむことから、大濠高校の田中先生等と関門大会を開こうと、福岡市、北九州市、下関市と廻り持ちで錬成会を始めたのもこの頃で、最初は男子だけで、大濠高校の合宿所で宿泊したことを思い出す。

昭和46年度は、私の子供が豊浦の最上級生としてバスケット部で活躍してくれた年である。心中複雑な気持ちであった。

関門橋の綱渡し作業日に、キャプテンと我が子を残し3年部員全員が有志と授業をさぼり見学にいった。学校にばれ、校長からもお目玉を喰らったこともあった。我が子に気を遣わせまいと努力もしたが、重荷をかけたかもしれない。

部員は3年生8名、2年生6名、1年生も多く大所帯であった。3年生には、特に優れた選手はいないが、2年生に東京教育大から日本鉱業で活躍した玉井和典が居た。3年生全員を使つての試合をと考えた。2チームを作り、5人全員数回の交代をし、後半10分を過ぎて、その場の状況に応じてメンバーを揃え、勝負した。2プラトンチーム作りは、最初の段階から最後の段階まで押し通すつもりではなかったが、回を重ねるごとに最高のチーム作りと考えるようになり、中国大会予選に勝ち、中国では3位、インターハイ予選も宇部商業を70-61とくだし、高松の24回インターハイに出場することになった。

勿論度々交代するので、オールコートマンツーマンディフェンスで、速攻を主にゲームをした。1回戦越ヶ谷高校を74-54でしりぞけた。2回戦メインコートは、体育館3階で、40度に達する暑さ。広島商業高校の生徒が、熱中症で意識不明となり救急車で運ばれた。

対戦相手の石川県立鉱業は、1名の交替を加えて6名で、豊浦は5名5名の交替10名で試合をした。出足は悪く、リードを許したが、途中から相手のスタミナ切れを突き、勝ちを握ったかに見えたが、残り5分頃だったろうか、エース玉井が目を負傷し、71-67で敗れた。

インターハイは、予選からの過密スケジュールで暑さも加わることだし、10名程度の差のない選手を使うことの如何に大切かを体験した。

長府は2年連続出場であったが、1回戦長崎鶴鳴に敗れた。

昭和47年は、宇部商業、下関工業に、良い選手が多くいた。その中に、下関工業の米村コーチが居り、素晴らしい跳躍力で、豊浦の玉井と競っていたのが忘れられない。

特に豊浦はメンバーが少なく、180センチの松橋がいたが、他は小柄な3名の中学からの経験者と、2名の未経験者でスタートした。2名の未経験者は中学では剣道と野球をしており、ともに身長165センチ、体重55キロ程度、体力に恵まれず、1年1学期後半から入部した。しかし、練習は熱心で、いつも午後6時にチームの練習が終わってから、さらに残って毎日個人的に練習を続けていた。

その中の1名は、2年になり、インターハイの際は前述した3年生の2プラトンチームの中に入り、活躍するようになった。わずか1年余りでこれまで成長するとは、最初考えてもみなかった。基礎的な練習を積み重ねる私の練習が良かったのか、疑問であるが、未経験者でもある程度の能力と努力さえすれば、2年になった時点で、優秀な1年の中学経験者を凌ぐレベルに到達できると思う。

此の様に、2名の経験者と2名の未経験者の4名に、2年生を加えて試合を始めたが、最初は負けるこ

とが多く、4月になりやっとどうにかまとまり、中国大会では由良育英、広島学園をくだし、準決勝松江工業にも接戦をしたが64-61で敗れた。

インターハイ予選は、高校から始めたガード寒田正毅が、決勝36-26とリードしながら、後半足の捻挫で出場できず71-72の1点差で涙を飲んだ。

インターハイ出場は逃したものの、彼等チームを一言で表現すれば、エレガントなチームであった。4名の3年生は、東京教育大、長崎大、立教大、関西大と進学し、学校の教職員からも、運動と勉学の両立ができると称賛を浴びた。

【第8回】

玉井、松橋等の3年生が引退し、6月から新チームの出発となった。7人の2年生は、身長が低く、フルコートマンツーマンの3対3の練習が主体で、プレスディフェンスから走り、カットインプレイのファーストブレイクのチームを目指した。

秋季県体は、下関工業に新人集団では全く歯が立たなかった。しかし、2年のキャプテン川口敏宏が、身長170センチではあったが、国体のメンバーに加えてもらっていた。

彼を中心に、県新人戦ではどうにか勝ち、第3回選抜大会中国予選に出場したが、鳥取工業に76-69で敗れた。

中国代表は、県立広島商業で、3月の全国選抜大会では優勝した。

昭和48年インターハイ県予選は、準決勝で柳井に69-67で敗れ、宇部商業が優勝した。柳井に徳永、宇部商業に豊岡、西岡等の優秀選手がいた。豊浦から日本体育大学に進み、厚南中や長府中でよい選手を育てた小西哲也（下関教育事務所）はチームの一員として活躍していた。

昭和49年、児玉典彦（川中中監督）、植野淳一（島根大学監督）等の好プレイヤーに恵まれ、新人戦、中国県予選に勝ち、4月の関門大会にも広島商業や大濠高校と好ゲームができたので、インターハイは間違いなく出場できると考えていた。

だが、インターハイ県予選では、キャプテン児玉を初め、チーム全体が過度の緊張から神経質になり、事故の力を出し得ず、準決勝では防府に82-81と勝ったものの、決勝で宇部商業に92-80で敗れた。

伝統の重みを感じていた彼等に、リラックスさせることなくゲームを迎えさせた私の失敗であった。

この年、昭和31年から昭和46年まで、山口県バスケットボール協会の理事長を務められ、当時、県協会副会長で防府市議会議員であった三戸雅之氏が50才の若さで亡くなった。防府市を会場として開催されている、三戸杯大会は、氏の生前の功績をたたえ、バスケットの発展を期して始められたもので、今年で20回目を迎えている。

県バスケットボール協会は三戸氏の理事長の後、当時防府商業に勤務していた中村豊嗣氏が継いだが、氏の内地留学のため、49年4月から吉村旦氏に交代したばかりで、三戸氏を失ったことは、県協会の運営には大打撃であった。

高体連も、和佐本生男氏が10年間専門委員長を務めたが、柏村勝氏（故人）に任を譲ったのもこの頃であった。

昭和50年は、昭和48年の下関地区1年生大会で、最下位の成績であったチームで、那須大輔（光丘高校監督）外3名と、2年生5名に1年生を加えて少人数でゲーム作りに苦労した。

生徒は練習熱心で順調に伸びたものの、インターハイ県予選では、センタープレイヤーを風邪で欠き、松田省吾（柳井高校監督）の居た柳井に3回戦で59－49の不名誉な成績に終わった。

昭和51年は、低迷を続ける高校バスケット発展のために、今まであまりバスケットに協力的でなかった県高体連を動かし、第4回日米高校定期戦を、山口市で4月に開催することを決め、山口県高校選抜チームを編成し、ハワイのカイザー高校と対戦した。

県チームは団長を柏村勝氏、監督を桑原英雄氏、コーチ佐藤理氏とし、県下から選手を選び、多くの観衆を集めて交歓試合をした。池本（下関工業）神代（宇部工業）等の活躍で、好ゲームではあったが敗れた。

しかし、高体連本部とバスケット専門部との意思の疎通ができ、財政的にも大成功であった。バスケットへの県高体連本部の偏見も薄れ、高体連専門部の予算も年々アップするきっかけとなった。

豊浦は、この大会に、キャプテンの竿浦を送った他誰も選ばれなかった。当時、中学時代にブラスバンドをしていた長身の原守彦（豊浦高校監督）が居た。

卒業生の物心両面に渡る多大の協力を得て、九州遠征や下関青年の家で合宿をする等、インターハイ4年の空白を埋めようと、福岡市での関門大会に引き続き、熊本から佐賀に遠征した。最後に対戦した佐賀県国体選抜チームにも2戦2勝と、よい感触であった。

中国大会は、下関であったことも幸いしてか、1、2回戦に勝ち、準決勝で好プレイヤー今林（島根県教員）等がいる松江工業に前半善戦したが、後半19得点に押さえられ、68－50で敗れた。だが、チームに2年のシューター山本が加わるにより、勢いが出てきた。

インターハイ予選は3回戦広瀬との対戦で、今まで一度も怪我のなかった竿浦を捻挫で欠き、キャプテンなしで以後を戦い、準決勝では、下関工業を下したが、決勝で宇部工業に敗れた。

夏休みの国体県予選は、新チームに竿浦、原の2名を加え、宇部工業に完勝した。中国予選は、下関工業の選手を補強し試合に臨んだが、中国代表にはなれなかった。

昭和52年には、中学校未経験者の長身190センチの中村淳をセンターに、初めて校区外の富田中から羽嶋が加わり、久しぶりにスタートメンバー平均身長179センチの大型チームが誕生した。

4月の朝日杯大会には、全国選抜大会でペスト8入りした大濠高校を降し、優勝を遂げたが、中国大会県予選では、宇部工業に決勝で敗れ、中国大会も準決勝で松江工業に敗れた。

インターハイ県予選では、1回戦から準決勝まで全く敵なく、決勝では宇部工業に前半34－36と2点のアヘッドを許したが、後半追い上げ、76－74と6年ぶりに第30回インターハイに出場できることになった。

松江でのインターハイの対戦相手は、宮崎工業。4月に福岡での関門大会で、102－58と大差で完勝している相手。間違いなく勝てるとの楽観が、スタートで先行され、焦りがファウルを生み、追えども追えども1度もリードできず敗れた。学校の伝統を説き、選手に集中力をと、懸命の努力をしてゲームに臨んだが、5年間のインターハイのブランクは埋めることができなかった。

伝統を築くのは難しく、崩れるときの脆さを痛感した。

昭和53年に、2度目の日米高校バスケット定期戦を実施した。ゲームにも勝てず記憶は薄い。

豊浦は1名の選手も出せず、チームは全く低レベル。しかし、手抜きをせず、特に身長182センチ体重78キログラムの体格のよい松井をセンターとして育てようと、個人指導に集中したものの、大成せず、中国大会、インターハイ予選ともに乗川嗣久氏（岩国高校教諭）の率いる広瀬に敗れた。

3年生7名中4名が、教育系大学に進学し、3名は小学校に、菊野良は徳山市立岐陽中でバスケットの指導をしている。

県協会は吉村旦理事長外若手が活躍するようになり、高体連専門委員長であった柏村勝氏を残し、水嶋、和佐本氏や私等高齢者が第一線から退いた。

昭和54年は選手不足に泣いた。中国大会に出場したものの、宇田川貴生君（鳥取東高校監督）の居た松江北に敗れた。インターハイ県予選は、3回戦で防府に敗れ、岩国が宇部工業を破り優勝した。

夏休み中は、練習の合間を見て中学校の試合応接に動き回った。県中学校選手権大会では、柳井中が1位、彦島中が2位。中国大会でも決勝は同一カード。今度は彦島が制し刺し、松江の全国大会へ駒を進めた。

当大会での彦島の活躍は目覚ましく、決勝戦で松江三中を56-42と降し、日本一に輝いた。彦島中監督藤井房雄（下関教育事務所）は、豊浦高校昭和43年卒業で、私が勝つ以上に嬉しかった。

秋季県体は、新人で出場。15分ハーフで実施されたが、当時10ファウル制であったのを利用し、うまいファウルで相手得点を押さえ、防府に勝ち優勝した。県総合選手権に出してもらったが、実業団チームに敗れた。

昭和55年2月には、山口県体育協会から体育功労賞をいただいた。今後も頑張りたいということだろうと思った。

昭和55年は、かなりチームが活躍しそうだと期待した。私の体調もよく、休日はバスケットに、平日は8時から19時まで、学校で疲れを知らない生活を続けていたが、春に突然メニエル氏病にかかり、1ヶ月余り学校を休み、検査と休養を余儀なくされた。バスケットの県大会にもいけず、選手に迷惑をかけた。

この折に、以前から時々練習等に顔を出していた、「南風」6号で触れた吉永兼雄君（豊浦高校42年卒）が、コーチとして手伝ってくれることとなった。思えば、片山隆剛先生が転勤されて、14年間私一人が生徒の面倒を見ていたことになる。

インターハイ県予選は、準決勝で岩国と対戦、5ファウルで主力を失い、リバウンドを取られ敗れた。岩国が2年連続インターハイに出場した。今、県教員団で活躍中の、中村昇（桑山中）池藤明（豊田西中）は、この年の豊浦のエースである。

この頃から、国体選手を全県選抜で構成、宇部商業の浜村悦己氏（保健体育課長）が指揮を取った。豊浦からも、選手を2名送り、鳥取まで応援にいったが、本国体出場には至らなかった。

昭和56年は、3年生が多かったが、身長にも恵まれず、中国県予選に勝ち、山口で開催された中国大会には2回戦で松江北に61-57で敗れた。

インターハイ県予選は3回戦で高さの柳井に完敗した。

防府商業に、長身の山本泰太郎が居り、選抜中国予選に勝ち、中国代表として全国選抜大会に出場した。山本君は拓殖大学に進み、現在は住友金属で活躍している。彼を中学時代根気強く育てられた岩崎克之助氏（秋穂中校長）の指導には、見習うところが多かった。

その他、岩陽高校に、今年のミニ国体でも活躍した宮浦和雄（福岡大学卒）等が居た。

昭和57年は、昭和54年全国中学大会で優勝した選手は、下関西、早柄に進学し、豊浦には一人もきていない。富田中から中村浩正（光高校女子コーチ）、2年で国体メンバーに選ばれた林桂一郎（新日鉄光）が居た。下関西、早柄に負けてなるものかと勝つための練習をした。

ただ、惜しまれることは人数の不足で、下級生の力を借りなければならなかった。週3回の1面のコートでの練習は、半面を遊ばせることは決してせず、18時には必ず練習を終わった。

当時、下関西高校には佐藤太助氏（萩養護学校教頭）が居られ、市内から将来性のある良い選手が集まっていたこともあり、勉強にも試合にも、決して負けられないと意識した年でもあった。

新人戦は、宇部工業に敗れ2位で、3位の萩商業とともに鳥取にいった。大会本部割り当ての宿舎が悪く、寒くてどうしようもないので、国民宿舎に移った。萩商業は、山田隆道氏（萩養護学校教諭）が良くまとめ、多数の父母の方々が、応援に来ておられたのには感心した。

関門大会は、4戦4勝。朝日杯も、岡山理科大付属、広島商、萩商業を降し優勝した。インターハイ県予選は、宇部工業と決勝となり、出足悪く、前半はリードを許したが、後半に逆転するも、途中キャプテン中村が足の故障で出場不能。しかし、残り2分4点リード。これで逃げ切れると思ったが、延長戦となり、64-62で敗れた。

全く運のないゲームのように思うが、自信が持てるまで、シュート練習をさせなかったのが敗因だった。私も57才になり、根気が足りなかったのだろうか。吉永コーチに誠に申し訳なかった。

秋の島根国体は、私が是非監督をとということで引き受け、選手選考会に20名の候補選手を集めて練習会を持ち、12名の選手を7校から選び、コーチを宇部工業の桑原先生にお願いした。

強化費が少なく、日本体育大学2軍の山口での合宿に加えていただいた。下関中央高校監督の山根浩一先生は、当時日体大の学生で、合宿しておられた。

また、徳山大学の合宿所に泊まり、ギブアンドゴーで良いタイミングシュートの全員バスケットを目指した。仕上げに、宇部での日本リーグ開催の前座に、福岡県選抜国体チームと対戦した。

松江での本大会は、全員出場で、57年インターハイ開催県鹿兒島選抜を降したが、日大山形に敗れた。

今年の宇部ミニ国体出場の、山口県成年男子チームには、当時の選手、中村、林、八木（協和発酵）の3名が活躍していた。

【第9回】

昭和58年の部員は3年10名、2年11名、1年6名、計27名の大世帯であった。現在教員団チームで活躍中の林哲郎(3年)中村勉(2年)等、部員はタイプが余りにも異なり、毎日の練習からゲームまともに至るまで苦勞し、結果8人でゲームすることにした。その8名も、市内7中学からの集まりで、2年程度の期間では選手間や私とのコミュニケーションが充分に取れず、個人特訓をしても徹底せず、練習量の

不足で、各人の能力を発揮するチームを作るのが困難であった。

4月の関門大会では、修猷館(熊谷組のエース後藤敏博がいた)、宮崎農業に勝ったが、大型の広島商、大濠に大敗した。県新人戦では、宇部工業に57-52で敗れたが、関門大会等の効果か、5月の中国予選では76-66で勝つことができ、やっと安定したかに思えた。大切なインターハイ県予選では、常に20点を稼いでくれた林哲郎が5反則退場、10数分程度の出場で6点しか取れず、宇部工業に5点差に泣かされた。

大事なゲームには、相手チームに対してのみではなく、審判に対する対策までも考えておかないと失敗することを教えられた。審判も人間であるし、一貫性があり公平な判定は非常に困難であろう。

昭和59年は小兵の集団であったので、走れ走れの練習を重ねた。時々過呼吸で倒れる生徒があり、私のイメージに至るには、余りにも障害が多すぎた。また、部員の合議制で選出したキャプテンが余りにもおとなしく、私の予想とは懸け離れていた。

私が公務で練習に参加できないこともあり、キャプテンの存在がチーム作りに影響した。その結果、中国県予選では柳井、下関工業を降したが、準々決勝で岩陽に50-48で、インターハイ予選も準々決勝で長身選手森田の居た下関中央工業に62-50で破れ、高水が優勝した。私の部員の掌握の拙さが出た年であった。

昭和60年は昨年の失敗を繰り返すまいと、キャプテンの選出には指導を加え、最適の生徒を得ることができた。

年明け早々の新人の選抜県予選では、三つ巴となり、得失点差の結果、1位高水、2位岩陽、3位豊浦となった。最終戦の岩陽対豊浦はテレビ放映され、新時代を迎えた感じがした。そのゲームでは、キャプテン神田の大活躍で快勝した。

選抜中国大会は、観音、松江工業を降したが、岡山理大付に敗れ、3位であった。

広島の全関西では1位リーグに残り、広島選抜に続いて2位と、好スタートをきった。中国県予選は、柳井工業、宇部工業、岩陽、下関中央工業を破り優勝し、中国大会では、また準決勝で岡山理大付とあたり、一松(195センチ)に40得点を許し、ゴール下の弱さを突かれて敗れた。

インターハイ県予選に向けて、上り調子のチームであったが、エース神田が練習中足首の捻挫で、数週間練習ができず、完治しないまま試合を迎えた。3回戦の岩国戦では前半リードを許し、後半から無理に神田を投入したが、全く不調で敗れた。

この大会は、岩陽が好センター宮浦稔(日本リーグ2部新日本製鉄でプレイ)を駆使し優勝した。

この頃から、毎年好シューターに恵まれ、勝敗を左右することが多かったので、シューター養成について質問が相次いだ。私は十分な練習時間が取れないので、チーム練習後特訓をしたが、「好きこそものの上手なれ」が結論のようで、強いて言えば、同一場所で、根気強く自信の付くまで連続して練習することが早道であると思う。

昭和61年3月が私の定年であり、最後の大切なゲームを私の失敗で飾れなかったのが残念でならなかった。良いチームを次に残そうと、夏休みも返上して頑張った。

秋にあと2年常勤講師で残って欲しいとの話があり、2年の猶予ができた。メニエルを患って右耳がや

や遠いし、不整脈もあったが、体調も安定している。校務も軽くなることだし、若い頃と同じように、バスケットに精力的に集中できると、一段と闘志が燃えた。定年後は、ゴルフでもしようと思っていたが、後に伸ばすことにした。

昭和 61 年は山口インターハイの年であり、選手強化に良い選手を求めようとしたが失敗、例年通り、長府中出身の生徒が多く、技能的にはやや良いものを持っているが、体力的には充分ではなかった。

下松高校は、柳井、下松、新南陽から優秀な選手が集まり、吉規先生の指導が実を結び、新人選抜県予選は下松が優勝した。2 位で出場した選抜中国地区予選は、倉敷青陵、広島修道、松江東を破り、下松 1 位、豊浦 2 位で第 16 回全国選抜大会に出場することになった。出場するにあたり、下関市内の早鞆、中央工業を中心にして壮行試合を催してもらった。奈良原、新井、小川等の大型チームとのゲームで良い経験をした。

本大会は東京開催であり、全国から男女 24 チームずつの出場にもかかわらず、大会本部は、代表者会議と、ゲームの運営を主催するだけで、宿舍も、練習コートの世話もなく、常に出場しているチームは、大学や実業団チームの合宿所に 2,3 泊し、練習ゲーム等の面倒を見てもらう所が多かった。大会そのものにも、問題が多すぎて好感が持てなかった。

豊浦は長府(女子中国代表)と共に友人や卒業生にお願いして、日本鉱業と日本女子体育大学の体育館を練習コートに借りた。

代々木の体育館でゲームのできたチームはよかったが、豊浦は都心から離れた世田谷学園が会場で、現在アンフィニ東京で活躍中の菅原(191 センチ)の居た関東高校との対戦であった。彼に前半 22 点を稼がれ、45-35 と先行された。後半ディフェンスをゾーンに変え、菅原を 12 点に押さえ、前半の差を詰めたが、80-73 で敗れた。ゴール下では得点できなかったが、3 点シュートを 11 本決め、相手を慌てさせたのは痛快であった。

試合終了後は、自由行動にし、私はゲームを見て歩いた。別に強制もしないのに、生徒は各自の目当てのチームを見学に行ったようで、その熱心さには驚かされた。

下松は、高崎商業と前半シーソーゲームをしたが、77-64 で敗れた。

中国大会県予選は 1 位宇部工業、2 位豊浦、3 位下松で中国大会に出場した。1 回戦は広島広陵に勝ったが、2 回戦で倉敷工業に 1 点差で敗れた。地元下松は実力を発揮し、優勝した。

インターハイは各種の事情で、陸上等の主競技は山口県で開催されたが、バスケットは岡山に取られた。県予選では下松に敗れ出場できず、豊浦高校が弓道の会場で応援には行けなかったが、下松は国学院久我山に勝ち、岐阜農林に 72-71 の 1 点差で敗れた。この年の下松はバランスの取れた好チームであった。

私は、インターハイ後半のゲームを見学に行った。福大太田高校がトライアングルツリーのディフェンスを駆使して優勝した。このコンビネーションディフェンスは、筑波大学の笠原先生がかなりの時間をかけて指導したらしく、太田の田中監督・中村学園の吉村コーチから練習方法など参考になる回答を得ることができた。しかし、コンビネーションディフェンスは、練習をしたこともなければ勿論使ったこともない。

昭和 62 年は下関中央工業の山口先生(長府高校)の長年の努力が実を結び、好ガード村田に長身センター小川(194 センチ)を擁し、徐々に力を付けてきた。豊浦には国体選抜に選ばれた直井とセンター佐々木

(181センチ)が居た。私は常に中央工業を意識して練習をした。

長門地区新人戦で、90-88 で一度勝ったものの、練習に工夫を重ね、弱点を突こうと努力したが、それ以降は勝てなかった。その工夫とは、マンツーマンのハーフコート・ダブルチームで、中国県予選の準決勝多々良戦に使う圧勝。自信を得たがそれ以降のゲームでは使用するチャンスが無かった。他県での練習ゲームで少々練習したので、この件で質問を受けることがあるが、スローインは審判の手渡しから始まる最近のルールでは効果を出すかもしれないと思う。

中国大会は、松江工業、鳥取東、岡山理大付を降し、決勝は下関中央工。小川の故障で勝てそうだったが、ゲーム終了間際に村田に3点シュートを決められ、73-72 の1点差で涙を呑んだ。

インターハイ予選では、佐々木を故障で欠き、準決勝で多々良に72-70 で敗れた。欲を言えばきりがないが、直井にシュート力を付けてやれなかったのが残念であった。小型のチームを良くまとめることができたのには満足している。

国体中国予選で、下関中央工業中心の男子、長府中心の女子ともに県勢は勝ち、沖縄国体に参加した。私は初めて妻を連れて応援に出かけた。沖縄宿舎もないのに沖縄在勤中の豊浦バスケット部の卒業生が、ホテルを無理して取り、その上石垣島、竹富島まで案内してくれた。

私の勤務も来年3月まで、全国選抜を目指してチーム作りを急いだ。昨年ゲームを経験した生徒もいて、余り苦労もなかった。昨年よりやや長身になるので、1・3・1ゾーンとマンツーマンを併用して走るチームを目指した。

1月の選抜県予選では防府、下関中央工、早鞆、高水と降し、中国大会に出場することになった。

2月11日、山口での日本リーグの前座に山口県選抜とゲームをして、13日からの大会に松江に直行。三刀屋、岡山理大付属、松江工業、倉敷工業と総て相手にリードを許さず、各ゲーム10数点差で圧勝した。

神戸での本大会は、静岡の興誠と対戦することとなった。私は最後のゲームを飾りたいものと、興誠のチーム力等の情報収集を静岡県の友人に依頼し、静岡県の地元新聞や、予選のスコアを集め、監督や選手の長所や短所を質問法で解答して頂き、整理してコピーした。

61年の選抜大会の経験から、大阪の北陽高校の合宿所に2泊し、高校や実業団チームとの練習ゲームを重ね、指定の宿舎に入ってから、アシックスの体育館を確保して練習をし、前述のコピーを各選手に配り、30分もかけてミーティングをしゲームに臨んだ。最初1・3・1のゾーンで仕掛けたが、相手のポイントガードがよく、途中からマンツーマンにした。前半、45-32のリードを許したが、後半追い上げ10分で逆転した。しかし、倉田(教員団)、井田が5反則退場となり、リバウンドを取られ、87-74で敗れた。日本体育大学のエースとして活躍し、今年三菱電機に入社した後藤正規(188センチ)を24点で押さえたが、センター鈴木(193センチ)に35点を許した。身長差を克服できなかったのが敗因であった。

宿舎に帰り、反省会で3月で別れなければならないことを初めて生徒に告げた。また、10数年に渡り、仕事の時間を割きコーチを務め、私を助けてくれた吉永兼夫氏の功績も大きく、さらに、多数の卒業生も応援に来てくれたのが大変嬉しかった。

帰宅して、例年よりやや遅れたが、恒例の3年卒業生とのお別れ会を我が家で催した。11名の卒業生部員全員は集まらなかったが、8名集まった。浪人が2名出た。私立大に、早稲田、立命館、松山大2名、国立大には、筑波、岡山、九州工大、長崎と各1名合格し、1名は道路公団に就職が決定していた。体育

教師として、バスケットコーチになり下がらず頑張った結果である。

40年と言えば長いですが、私にとっては短かった。あの古い旧剣道場の片隅で、タオルを水に濡らし、水を飲まずに汗と水のタオルをしゃぶり、何でもできる自由な青春を、頭を丸め、精神的な苦痛を乗り越え、遊ぶことも忘れ、勉学とバスケットに過ごした部員の努力に敬意を表したい。私も生徒のその努力が報われるように無駄な時間を過ごすことなく、また、体育館を遊ばせることもせず、毎日メニューを替え、計画を立て、楽しい中に激しさと集中力のある練習をと心がけた。放課後できるだけ早く服装も練習用に整え、椅子に座ることも、途中休憩もせず、練習コートからはなれることをしなかった。

常に公平を心がけるとともに、必ず勉学の時間を作るように配慮したが、苦しさや自由の欲しさに、また勉学と部活の両立に疑問を抱く者等、途中で中止したものも多く居た。しかし、3年間を部員として全うし卒業した生徒も多く、私の40年間で合わせて270名に達し、豊浦の1学年の卒業生に相当する。

卒業式に、卒業生代表として答辞を読んだ部員も5名を数え、大部分は勉学と部活を全うして卒業した。

社会人として定年を迎えられた方、早稲の中川勲児氏のように故人になられた方も居るが、大部分は各方面で活躍を続けている。尚、バスケットの指導に携わっている方も30余名、立派な選手を育て、良いチームを作り、バスケットの発展に寄与してくれるものと期待している。

思い出すままに、資料や写真に頼りながら、不審な点はその関係者から回答をいただき、ここまで書き綴ることができたことを感謝し、今後皆様方の益々のご発展をお祈りし、「南風」がいつまでも続き、山口県バスケットが日本に翔くことを期待して終わりにします。

有難うございました。

※ この文章は、高体連機関誌「南風」第1号(H3年4月)～第9号(H6年1月)に掲載されました。
文章中の人物の肩書きは当時のものです。